

## 令和7年度練馬区立光が丘さくら幼稚園学校評価報告書

練馬区立光が丘さくら幼稚園

### 1 自己評価結果

#### (1)概要

今年度は産育休代替教諭が年度始めから1名、年度途中から1名と学級担任の半分となる学級運営となった。園の人事の変更にもかかわらず、保護者への「幼稚園の教育活動に関するアンケート」は全員の方から回答を得る回収となり、保護者の意見を集約し考察することができた。このことは、園の教育について保護者の関心が高いことが読み取れ、共に子どもたちを育てる思いを共有していると感じることとなった。さらに、どの項目についてもA、Bの肯定的評価が高く、保護者の園への信頼・関心の高さと同側の努力が伝わった結果と受け止めている。幼稚園に対する様々な温かな自由記述から支援していただいていることが読み取ることができ、今後も熱いエールを頑張り幼稚園経営に取り組んでいきたい。

#### 【成果】

○本園の特色ある教育活動として今年度は「多様な人と関わる中で共に育つ教育」を推進した。「多様な人と関わる中で共に育つ教育」については A、B 評価合わせて100%という最も高い数値となった。近隣の保育園児、未就園児、小中学生、高校生、高齢者等と計画的に交流、みんなともだちの日や親子で遊ぼうデー、どんどこまつりへの地域の方や児童館による様々な体験、日々の保育の中で特別支援学校のコーディネーター、警察官や消防署、防災課や清掃事務所、保健所、療育機関、様々な講師の先生などとの連携による様々な体験活動、それらの教育活動で地域とのつながりにより教育内容の充実を図り、多様性を尊重し、共生社会を目指していることが評価につながっていると考える。近隣の公園、区民体育館プール、地域の農家で芋ほり等の地域の施設を活用して遊びや生活をつなげ、生かされていることも評価の現れと考える。また、日々の教育活動では教員は豊かな遊びにつながる環境を構成し、多様な人との関わりの中で、主体性を始め、幼児期の資質・能力の育成、年齢やその時期に応じた育ちを読み取りながら分析し幼児理解を深め、教師の援助について協議し実践につなげてきた。それらを分かりやすく、担任からは降園時の保護者へのホワイトボードや口頭での連絡、学級保護者会や個人面談での伝え方を工夫し、管理職は園日より、行事のある日に写真でのお知らせ、廊下の写真掲示、保護者にわかるように選定した写真販売、さくらトーク(園長と保護者の懇談会)、Sigfy での配信で「見える化」「分かる化」を実践してきたことも保護者の理解を得られたと思われる。保護者から、非認知能力を育てていると感じるとの言葉を大勢からいただいたことも、保護者と教育内容を共有していることを大いに感じる。

○近隣小学校長や保育所園長、高等学校長等の教育関係の管理職との顔の見える関係の中で連携をさらに進めて、園の実態も理解していただいた。小学校長の講話や光が丘第11保育園看護師による保健日より、及び幼児への話なども地域との連携や多様な人と関わることに繋がった。

○保健所の栄養士ともとなり毎月の「練馬の食育応援します」のほかに今年から、「ちゃんとご飯プロジェクト」の開催に尽力いただき、幼児にとっても食育の一つとしてのよい機会をいただいた。その後も、保健所に訪れた親子を幼稚園に誘ってくださるなどいい関係性ができている。

○教育目標の評価で A 評価が増加し、明るく元気な子どもについては A 評価100%という大変好評価となったことに目を向け、保護者に分かりやすく日々の保育の中でも育てていることが実感できるように伝わったことを感じる。

## 【課題】

○今年度のように担任の出入りが多くなると、近隣や地域の方々とのつながりを担任自身が見通して、保育の組み立ての中で構築するのが難しい状況である。管理職がつながり、仲介していくことが必要となる。

## 【改善策】

○教員の質の向上に努め、保育の充実を図る。そのことが、しっかりと保護者に伝わり、実感できることへつなげていく。幼稚園の好きな遊びの意味を幼稚園指導要領、園の教育目標、練馬区子育て大綱など幼児教育の根拠になるものとのつながりを含めて分かりやすく伝える努力をし、主体性を育てていることを感じてもらう工夫。

○保護者にはわかりやすく、文科省の動画や、日々の写真を見せる中で幼児の姿を通して教育内容の意味を伝えてきたが、その機会になるべく多くの保護者が参加できるように工夫し、アピールしていきたい。写真を貼って育っている意味を伝えるかわら版やHPの活用、区立幼稚園のXの発信などで教育の意義や関わっている団体なども丁寧に伝えていく。園内だけでなく、外部への発信も今後検討していきたい

○保護者が一人で育児に悩まないよう、様々な関係機関ともつながりをもち、長い人生の中で、見通しがもてる機会を提供し、今が大丈夫という気持ちにつながってもらえるような機会にしていきたい

○近隣小学校長や保育所園長、高等学校長、私立幼稚園、認可保育所長等との顔の見える関係の中で連携し、幼保小の架け橋プログラムの意味を丁寧に伝え、実施を進めていく。

## (2)根拠となる資料

### 保護者アンケート集計結果



## 2 学校関係者評価

### (1) 総括

#### 関係者評価委員会より

##### 【成果】

- ・人権教育のいじめ防止実践事例のパワポを見て、在園児ひとりひとりが幸せだと感じる。
- ・様々な地域の施設と連携を図り、人とかかわる力を育てていることがよくわかる。いろいろな人と関わらせていくことがすばらしいコミュニケーションの素地を作っている。しかし、いじめ防止実践事例のパワポも保育見学も幼児の活動の一部でしかない。準備や過程でいろいろあるのにおいしいとこ

ろしか見ていないが、これだけ多くの努力をしていることが素晴らしく、日々の努力に頭が下がる。

・大人や小中学生と関わることで自己肯定感のきっかけの種をまいていると感じる。このことを小学校に引き継いでいくことを感じている。来週の交流活動が互惠性のある関わりになることを望む。

・運動会を見学したが、多様な幼児がいるが先生も子どもたちも笑顔。笑顔が何よりのご褒美で先生の素晴らしさを感じる。

・チームさくらのことばがとてもよい。預かり保育でものびのびとした保育で安定して見守られている感じがある。心を一つに対応して下さっていると感じる。

・保護者が様々な話ができる。卒園してからも小さいころから知ってもらっているので、受け入れてもらえる安心感がある。

・100%のA評価は他でも見ない。保護者がここにいてよかったと思っている。保護者も安定している。教員の姿勢がすてきだから、受け継がれていくと思われる。

・高齢者は来てもらうのをとても楽しみにしている。家族の形が変わってきて孤独な高齢者も多いので、とにかく園児と触れ合えることを楽しみにしている。普段見ることがない笑顔をたくさん見せてくれている。園児さんのそのパワーをもらうだけでたくさんのプレゼントをもらっている。お返しができればと考えている。

#### 【課題と改善策】

光が丘は自然が豊かで子どもにとって恵まれている環境である。この環境を活用しないともったいないと感じているので、幼稚園も是非活用してほしい。

・教育と福祉をどう連携していくのが課題。

・園児減少と聞いたが関わり的人数が少ないのならそれを強みに変えてほしい。人数が少ないと自分から関わっていかないとならない。少人数なら自分が出せるよさを前面に出して発想の転換がよいと思う。

・コミュニケーションが大事といわれている。この30数年でその力が足りなくなったのを感じる。また、絵本や昔話を知らない幼児が増えてきている。ぜひぜひ心の耕しとしての本の読み聞かせを続けてほしい。

・ICTの活用は高齢者施設においても推進するよう言われている。昔話やその花の写真を見せて、花の話をしたり、することにもつながれる。今後のさらなる検討を期待したい。

・介助員と特別な配慮が必要な幼児の関係のやりとりを子どもたちはモデルにして考えて関わっていると感じる。モデルになる大人が充実していることがよさであり、今後にもつなげてほしい。社会にはいろいろな人がいる。関わりの中でしょうもないなどやり取りで学んでいる。大人のもっていきかたひとつで温かい保育となる。モデルで示すことが大事だと感じる。様々な人が関わる世の中で温かく、人としての器の広い人を育成していきたい。

・0. 1. 2. 歳児の保護者は待っているのは孤独である。保育、教育を地域の中に入れて是非進めてほしい。2歳児1年保育を利用して幼稚園のこども園化が必要かもしれない。

### 3 評価結果の公表等

・事前に資料を配布し、2月6・13日保護者会にて園長より説明。

・本園ホームページに3月中に概要を掲載。

### 4 次年度の学校改善へ向けた園長の見解

#### (1) 中期経営目標の実現に向けて

- |  |
|--|
| <ol style="list-style-type: none"><li>① 幼児期の豊かな体験を保障し、「主体的・対話的で深い学び」につなげる幼児教育の実践</li><li>② 課題の発見と解決に向けて主体的、協動的に教育活動に取り組む喜びを感じる教員の育成</li><li>③ 区立・地域の幼稚園としての子育ての支援を推進</li></ol> |
|--|

### ① 「幼児期の豊かな体験を保障し、「主体的・対話的で深い学び」につなげる幼児教育の実践」

幼児の育みたい3つの資質、能力に着眼しながら幼児理解を深め、教師の援助や環境について共有をしてきた。

今年度は自然環境について考察しながら、環境の工夫や援助の工夫について時間をかけて進めてきた。園庭の自然環境では、虫を呼ぶためにどうするか、食育のためにどのような栽培物にするのか、この木は何の木なのか？など、疑問を環境として工夫したことで、幼児にも教師にも充実した研修となった。さらに教育課題研究指定校をうけ、来年再来年度は、自然環境の見直しと、日々の保育の経験がどんな力につながっているのか、根拠となる幼児教育要領や幼保小の架け橋プログラムなどとも紐付けながら、環境構成と遊びや育ちを育める教員としての資質向上を目指したい。

### ② 「課題の発見と解決に向けて主体的、協動的に教育活動に取り組む喜びを感じる教員の育成」

幼児を育てているのは教員だけではなく様々な人との協同であり、それをさらに協働として、光が丘さくら幼稚園に関わる教職員すべてを「チームさくら」とにして共に喜び考える集団となれるよう主事や事務等の幼児と少し離れた立場にある職員や預かり保育の教員、介助員と正規の教員と様々な業種の教職員が同じ方向を目指して幼児に関われるようにしていきたい。自己改革、自己発揮ができ自己有用感をもち、気持ちの余裕をもって保育に共に臨めることを進めたい。

### ③ 「区立・地域の幼稚園としての子育て支援の推進」

園児に関わるだけでなく、地域の乳幼児も支援できるよう、就園前の親子の育児相談、子育て情報、コミュニティーの場など居場所になるように推進する。地域に根ざした幼稚園・必要とされている幼稚園になるように具体的に未就園児保育、施設・園庭開放、行事などの充実方法を考えていく。未就園児親子が気軽に利用できる方法として、修了生保護者で未就園児がいる親子を中心に、さらにさくらサポーターの力を借りて運営していく方向で、幼稚園がアドバイザー的に関わりながら、居場所作りを進めていく。また、子育て相談や子育てのヒントが伝わる会なども企画していく。

昨年度始めた近隣の保育所と連携した小学校長の講話の会や研修会を4園1校で連携して来年度も考えていながら校園長同士がつながっていき、直接育てたい幼児や児童の姿を具体的に話す機会を作ることもできた。教育課程も含めて幼保小の連携架け橋期プログラムの実践を推進していきたい。また、幼児同士、幼児と児童の交流だけでなく保護者にも連携をつなげ幅広い子育ての情報を提供し、家庭、地域との連携を推進していく。

保育所の看護師との連携事業も今年度も継続でき、よい経験につながったことを踏まえ、さらに、来年度は深めていきたい。また、児童館や区民館などと提携し、出前連携も引き続き考えていきたい。保健所との連携によりホームページに食育についての発信を添付、講演会の実施も継続し、今年度から始めたちやんとご飯プロジェクトの実施は継続して、保護者への啓発も含めて考えていきたい。また、1歳児の親子の訪問が地域の子育て保護者への支援になるよう工夫したい。

私立こども園との連携ではより関係が深くなったことで幼児教育の教員の様々な資料提供や研修にもつながり、特別支援についてだけではないつながりができているのを感じる。来年度もさらに深めていきたい。公立の保育所、私立保育所、療育機関などからの見学の依頼が何件も来て入れている。今後も多くの見学があることが予想される。保育者等訪問支援との連携、就学相談、子育ての悩みなど保護者のニーズに寄り添って子育て応援団として関わっていく。

## (2) 今後継続して追及していきたい課題

### ○幼保小連携教育の推進

生きる力の基礎を育むため、幼稚園教育において育みたい3つの資質・能力を押え、高等学校までつ

ながっているこの3つの資質・能力をしっかりと幼児児童間交流、教員間交流を通して「ねりま架け橋期プログラム」を活用し、推進、実践していかねばならない。校園長同士が連携を取りやすくなっている。今年度文科省の幼児教育の動画を見てもらい、公立幼稚園の保育の理解を深めてもらっている。今後さらに、教育課程に踏み込んで光が丘秋の陽小学校、保育所(第7、第11、第9保育園)と幼保小連携教育を進めていけるように、様々な資料提供などを行っていくことが必要だと感じている。

私立こども園や他の幼児施設、公立私立の保育所ともつながりができたことから、行政に協力していただき、講演会や研修会の案内をはじめ、教育内容を伝え、同じ練馬区内の幼児施設の現場として練馬区の幼児教育の質をあげるべく機会を推進していきたい。特別支援学校や特別支援学級・教室、療育施設などとも特別な配慮を必要とする幼児の幼保小の架け橋期についても連携して考えていきたい。

### ○子育て支援教育の充実

在園児、未就園児の保護者に子育て支援の必要性を感じる。自分から発信したり、自分から飛び込んでくるのが苦手な保護者を多く感じる。幼稚園側が提供していく中に、参加できたり、話せたりする機会を考えてきている。正門での登降園時の園長からのなにげない会話や相談しやすい関係性の構築も大事だと考えている。さらに、今年度は心理士による相談事業を行い、未就園児の保護者の相談の第一歩と大きく貢献した。今後も、未就園児の保護者への相談事業を引き続けたい。また、同年齢による保護者の関係性だけではないコミュニティーの場を「桜友(おと)」と命名して開催した。10数名の様々な年代の保護者が集まり、お互いの悩みと経験談とのいい語り合いの場となった。今後も続けていきたい。園内だけでなく、地域の乳幼児施設からのオファーが今年度2カ所あった。保護者サークルと共に出向き、地域の中の幼稚園として子育て支援に力を入れ、とても好評であった。こちらも来年度以降続けていく予定となった。園内、園外の保護者の子育て相談のニーズも高い、様々な需要に応じて対応を工夫していきたい。

### ○特別支援教育の充実、幼児一人一人の特性に応じた指導の充実

特別な配慮が必要な幼児も他の幼児も幼稚園の生活の中で共に育ち合う共生社会を目指し、一人一人の幼児の特性、多様性を理解し、研修、共通理解を重ね、教職員がチームさくらとしての質の高い保育を実践していけるようにする。学務課就学相談係との連携した、保護者への説明も2年目となった。保護者のニーズも高く、この時期に予定することで見通しがもちやすい。来年度以降も特別な配慮が必要な幼児の実態により連携したい。

私たち教員にも本園や区立幼稚園だけではなく、同じ幼児施設の見学や研修、支援学級見学会、都立支援学校への見学、中学校の特別支援学級八校文化発表会や小学校図工展、特別支援学校高等部の行事やカフェなど施設への見学や研修にも積極的に参加し、実際の具体的な姿を把握して、連携や接続を図るための方法を模索し、教育の縦・横の両方の視点からも幼児の発達や幼児理解が繋がっていることを知り、指導に活かすことにつながっている。

また、保護者と共に、幼児理解を深めていくために、保護者に広い視野で見通しをもち、未来をたのしみにできるよう、様々な学校と連携を図り、体験、参観していく機会をもっていきたい。保護者支援のためのコミュニティーの場づくりや連携としての関わり、個別相談も推進していく。外部講師による研修の機会、介助員の資質向上を含め教職員が共有できることをさらに考えていきたい。今年度の学校教育支援センターのオンデマンドの研修会の自由参加は介助員の意識向上につながった。今後も管理職がアンテナを張り、案内する。障害者施策推進課 事業計画係より声のかかったことからここ数年実施している障害者理解のための派遣授業を重症心身障害者(児)を守る会や 練馬聴覚障害者協会 手話対策部の手話講話など諸団体との連携を行っている。今後も、幼児も保護者も障害を特別としないで共生社会と考える関係性ができる機会を構築していく。

田柄高等学校との連携がある強みを活かし、多国籍の交流などアイディアを出していきたい。